



ひめゆり平和記念資料館

# 資料館だより



第46号  
2010.11.30

## 目次

- 資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1  
県外巡回展「ひめゆり 平和への祈り〔沖縄戦から65年〕」開催中／かわら美術館での講演会／巡回展開催報告 長野会場／四日市会場／水戸会場／「ひめゆりアニメ・プロジェクト」公募作品展開催中／第3回ひめゆりガイド講習会開催／「第14回戦争遺跡保存全国シンポジウム南風原大会」に参加／台湾沖縄平和交流の旅
- コラム 相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 研究ノート②相思樹並木と「別れの曲」・・・・・・ 7
- 研究ノート③コザ孤児院とコザ第4小学校・・・・・・ 9
- 仲宗根政善日記抄(43)・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 本棚 (仲程昌徳)・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
- 声 (沖縄県 神里年子)・・・・・・・・・・・・ 14
- 資料館ガイド・・・・・・・・・・・・・・・・ 15

# 資料館トピックス

## ◆県外巡回展「ひめゆり 平和への祈り〔沖縄戦から65年〕」開催中

当館では今年4月から愛知県を始めとする5府県で初の県外巡回展を行っておりますが、5会場中4会場（高浜市やきものの里かわら美術館・長野県立歴史館・四日市市立博物館・水戸市立博物館）での開催が、いずれも好評のうちに閉幕いたしました。今回は、そのうち3会場の様子をご報告いたします。

現在、最終会場の大阪人権博物館にて開催中（11月16日～12月26日）です。お近くの方は、ぜひお立ち寄り下さい。

## ◆かわら美術館での講演会

愛知県の高浜市やきものの里かわら美術館での巡回展関連イベントとして、ひめゆり学徒生存者である当館館長宮良ルリの講演会が2010年4月29日（木）、30日（金）に開催されました。

初日は高浜市いきいき広場ホールで、満席の約120人が参加し、幅広い世代の方にひめゆり学徒の戦争体験を聞いてもらう機会になりました。質疑応答も活発に行われ、「戦争を知らない人にどういったことを伝えてほしいか」という質問に対して、宮良からは「あなたが思っていることを、あなたのまわりに伝えて輪を広げてください。伝えようとする気持ちがあれば必ず伝わるはずです」と応答がありました。

2日目は高浜市中央公民館で高浜市の3つの小学校と1つの中学校の生徒640人にむけて行われ、小中学生たちが真剣な表情で聞きいっている様子が見られました。

かわら美術館では期間中、のべ9,044人の来場者があり、名古屋市などの周辺都市から足を運ぶ方も少なくありませんでした。「ひめゆりの方の戦争に対する深く強い思いを感じることができました」という感想も寄せられており、当館の思いが伝わっていることが実感できるような展示会となりました。



講演を行う館長宮良ルリ

## ◆巡回展開催報告 長野県立歴史館

長野県立歴史館での巡回展は、2010年5月29日（土）から7月11日（日）に開催され、のべ8,728人が来場しました。歴史館のある千曲市は、長野市と上田市の中間に位置し、あんずの里として知られます。太平洋戦争末期に本土決戦に備えて建設された松代大本営は自動車ですら15分ほどのところへ。長野県立歴史館では、縄文時代から近現代までの長野県の歴史を展示し、県下から多数の小中高校が見学に訪れます。そのため、展示解説員が生徒をクラスや班ごとに分け、順路を変えて案内しています。展示解説員の半数は現役の教員で、ユーモアも交えながら生徒の理解を深めるよう解説を工夫していて、非常に参考になりました。

巡回展の初日には、沖縄への修学旅行を予定している須坂高校生300人余が午前と午後に分かれて見学



長野県立歴史館 外観

しました。学校団体の見学をスムーズに効果的に行うため前日遅くまで話し合いをしていた展示解説員が、生徒たちを案内していきました。

7月3日(土)、4日(日)の2日間、巡回展の一環として当館の島袋淑子副館長が長野で講演を行いました。3日の午前には地元の屋代高校(生徒280人)で、その日の午後には長野県立歴史館講堂において講演を行い、252人が参加しました。講演後、合唱曲「ひめゆりの塔」をきっかけに沖縄戦を学んできた佐久中学校3年3組の生徒が合唱を披露しました。翌4日には座席数230席を大きく超える315人が参加しました。

開催期間中には、6月5日(土)に講演会『無言館』のこと―戦没画学生が伝えるもの(無言館館主・窪島誠一郎氏)、6月19日(土)に講演会「日本赤十字社の創設と元救護看護婦の証言」(元日本赤十字社看護大学司書・吉川龍子氏、元赤十字社救護看護婦・高野夏美氏)、7月10日(土)に講座「戦争遺跡が語るもの」(長野県立歴史館資料課長・原明芳氏)などの関連行事、さらに地域展「日本赤十字社長野支部の救護班派遣」など、多彩な取り組みが行われました。



内覧会で説明を行う当館学芸員古賀徳子



歴史館の職員と当館副館長島袋淑子

## ◆巡回展開催報告 四日市市立博物館

県外巡回展3カ所目は、三重県にある四日市市立博物館で開催されました。四日市市は三重県内では北勢地域最大の都市で、愛知県名古屋市から電車で40分ほどの距離にあります。

四日市市立博物館は、近鉄四日市駅から徒歩5分の場所にあり、プラネタリウムも併設する、大きく現代的な建物の博物館です。展示会場スペースも開催館の中で一番広いものでした。

7月19日(月)にはオープンに先がけ内覧会が開催され、四日市市立博物館学芸員の野口裕氏と当館説明員の尾鍋拓美が、約80人あまりの博物館ボランティアスタッフの方たちに展示解説を行いました。

また8月3日(火)、4日(水)にはひめゆり学徒生存者で当館副館長である宮城喜久子の講演会が、博物館隣のじばさん三重にて開催されました。両日とも約200人が参加し、講演後は展示会場にて、講演した宮城による展示解説も行われました。講演を聴いた参加者の多くが展示解説にも参加し、さまざまな質問が寄せられました。

四日市会場からは、ひめゆり学徒生存者たちが、戦後をどのように生きてきたのかを証言している映像『ひめゆりの戦後』が上映され、多くの参観者が熱心に見入っていました。

7月21日(水)から9月5日(日)までの期間中、のべ9,383人が本展示会に足を運びました。

期間中、博物館4階では、巡回展と連動して、「四日市空襲と戦時下の暮らし」展が開催されました。空襲時に避難するための防空壕の小型模型や、砲弾のレプリカ、四日市市民から寄せられた実際の防空頭巾や慰問袋、慰問はがきなどが展示され、来場者には地元の戦争体験を知る機会にもなったと思います。

巡回展には、中日新聞や四日市ケーブルテレビなどの多くの地元メディアも取材に訪れていました。

展示会場には来場者に、当館に送る千羽鶴を折ってもらうコーナーや、幼稚園生や小学生にも考えても

らえるよう、戦争関連の絵本のコーナーも設置され、夏休みということもあり、多くの来場者に戦争と平和を考えてもらう機会となりました。



副館長宮城喜久子の講演会の様子



当館説明員の尾鍋拓美が内覧会で説明を行った

## ◆巡回展開催報告 水戸市立博物館

2010年9月19日(日)から10月24日(日)まで開催された水戸市立博物館での展示会は、水戸市の核兵器廃絶平和都市宣言25周年を記念する特別展としての開催となりました。東日本唯一の開催とあって、関東全域から多数の来場者がありました。

水戸市は茨城県の県庁所在地で、東京から北東へ約100kmの位置にあり、人口は約26万6千人。先の大戦では、1945年8月2日未明に米軍のB29機による空襲を受け、水戸市街のほとんどが焼失、この空襲によって300人以上が亡くなっています。

沖縄戦で亡くなった沖縄師範学校の野田貞雄校長の前任校は茨城県女子師範学校と茨城県立水戸第二高等女学校でした(両校は女師・一高女と同じく併置校)。水戸には多くの教え子があり、展示会場にも野田校長を偲んで見学される方の姿がみられました。この展示会を機に、水戸市立博物館や朝日新聞社の取材により、野田貞雄校長について教え子や家族の思い出が語られ、水戸時代の野田先生の様子も明らかになりました。

水戸会場には、巡回展とあわせて「戦争を伝える—水戸」という特別展示がありました。65年前の空襲や、戦時下の生活の様子だけでなく、戦後の戦争体験の聞き取りや、伝える活動を紹介する展示がありました。また、水戸第二高等女学校の卒業アルバムに掲載されている野田貞夫校長の写真も展示されていました。沖縄戦と水戸の戦争の記憶とを重ねて見る事ができる企画でした。

10月3日にみと文化交流プラザで行われた記念講演会では、館長の宮良ルリが戦争体験講話を行いました。会場



館長宮良ルリによる講演の後、水戸第二高校生による朗読が行われた



内覧会で説明をする当館説明員仲田晃子



水戸第二高女のアルバムの中の野田校長

は400人近くの来場者で満席となり、みなさん熱心に耳をかたむけていました。また、講演の後に茨城県立水戸第二高校放送部の生徒5人による、ひめゆり学徒生存者の手記の朗読が行われました。戦争体験のない高校生たちが朗読で伝えるという試みは、戦争体験継承への希望を感じさせるものでした。さらに講演会終了後には、水戸芸術館会議室において、水戸市で戦争体験を伝える活動をなさっている方々との交流会が持たれました。交流会には当財団理事長本村つる、館長宮良ルリ、神奈川県在住のひめゆり学徒生存者吉村秀子さん、当館職員が参加しました。それぞれの活動の紹介や、その活動を通しての感想などが話され、さまざまな活動を知る機会となりました。

## ◆「ひめゆりアニメ・プロジェクト」公募作品展 開催中

6月23日より当館第6展示室にて「ひめゆりアニメ・プロジェクト」公募作品展を開催しています。当初8月31日まで開催の予定でしたが、参観者の皆様のご好評につき2011年1月3日まで延長することになりました。

「ひめゆりアニメ・プロジェクト」は、学徒の戦争体験や思いを小学生にも理解できるようなアニメーションはできないか、と2006年より発足し、制作に取り組んできました。制作にあたっては、学徒生存者の思いを織り込むことを重視し、既存のアニメーション作家ではなく、共に制作に参加して下さる原画作者を公募することとなりました。

2008年1月に公募し、半年間で県内外より、個人・団体合わせて20組、延べ191点の作品のご応募がありました。応募作品の中には、学徒の証言をもとに描かれたものだけでなく、独自の世界観でアニメストーリーを考えたものなど様々な作品が集まりました。ひめゆり学徒生存者と専門家の審査員による慎重な審査を重ねた結果、2人の原画作者が選ばれ、現在アニメ作品と絵本の制作に取り組んでいます。



応募作品の数々



アニメ制作の議論を進める証言委員会

## ◆第3回「ひめゆりガイド講習会」開催

2010年9月24日、当館多目的ホールにおいて、バスガイドや平和ガイドを対象とする「第3回ひめゆりガイド講習会」を開催し、53人が参加しました。今回の講座のテーマは「学校生活、沖縄陸軍病院への動員、南部撤退」と「南部撤退後のひめゆり学徒隊、伊原第三外科壕とひめゆりの塔」の2つで、当館の学芸課職員が講師を務めました。

今回は参加者とのコミュニケーションを重視し、質疑応答に1時間の時間をとりました。参加者からは「山城本部壕の中の様子はどうだったか」、「日本軍との葛藤はあったのか」など多数の質問が寄せられ、証言員（元ひめゆり学徒）と学芸課職員が分担してお答えしました。例えば、「陸軍病院での薬品の状況はど

うでしたか」という質問には、「20号壕（第二外科本部）には薬がぎっしり入った木箱が置かれていて、あまり不自由しなかった。ただ、痛み止めのモルヒネは簡単には使えなかった。」（津波古ヒサ証言員）、「長期戦に備えて節約せよと言われていた。糸数壕でも最初は血清注射、麻酔注射もわりと打っていた。5月10日以後は薬品が足りなくなった。衛生兵が南風原に薬を取りに向かったが間に合わず、けいれんを起こしながら死んでいく破傷風患者もいた。」（島袋淑子証言員）など、各壕からの証言があり、一つの事象を多面的に捉えることができました。こうした活発な対話によって、参加者の理解と関心はさらに深まったようです。アンケートには、もっと詳しく知りたい、たくさんの講習会を開いてほしいとの声が多数寄せられました。今後もみな様のご要望を可能な限り取り入れ、本講習会を開催していきたいと考えています。



説明員の尾鍋が講師を務めた

## ◆「第 14 回 戦争遺跡保存全国シンポジウム 南風原大会」に参加

「ヒトからモノへ」をテーマとした「第 14 回 戦争遺跡保存全国シンポジウム 南風原大会」が、去った 6 月 19 日・20 日、南風原町立南風原文化センターや南風原町中央公民館を会場に開催されました。戦跡保存や活用をテーマとしたシンポジウムが開催され、その後、第一分科会、第二分科会、第三分科会に分かれ、各参加団体による活動報告が行われました。

シンポジウムでは、5 人のパネリストが南風原町、たてやま（千葉県）、松代大本営（長野県）の取り組みを紹介。南風原文化センターの前館長大城和喜氏から、沖縄陸軍病院 20 号壕の公開について、公開すると風化が進むため、保存と公開のはざまでもとも悩んだこと、しかし、保存するだけで活用しなければ意味がないと公開に踏み切った経緯が報告されました。

当館学芸課職員は第三分科会「平和博物館と次世代継承」に参加しました。第三分科会では各団体のガイド実践報告がなされ、当館からも学芸員の前泊克美が「ひめゆり平和祈念資料館 次世代の取り組み」と題して活動報告を行いました。各団体の報告からは「(戦争の話を) 中高校生が聞いてくれない」「体験者ではなく非体験者が語る時、どうしていくべきか」など、共通の課題が多いことを確認できました。

時間の制約があり、議論を深めるに至らなかったことは残念でしたが、戦争体験者が減っていくなか、戦争遺跡の保存・活用をどう進めるべきか、次の世代にどう伝えていくべきかなど、多くの方々と課題を見つめ直すことができた、充実した大会となりました。



シンポジウムの様子



分科会で報告をする当館学芸員前泊克美

## ◆台湾沖縄平和交流の旅

去る8月29日から31日までの3日間、当館館長宮良ルリ、学芸課長普天間朝佳が、台湾の国立台東生活美学館館長林永発氏の招待を受け、視察・交流の旅をしました。同じく、沖縄県平和祈念資料館の大川芳子館長、佐喜眞美術館の佐喜眞道夫館長も招待を受けました。

現在、台湾では戦後40年近くも続いた蒋介石とその息子蔣経国政権による民衆への人権抑圧（白色テロ）の歴史を見直し、それに関連する痕跡を史跡として保存し、人権の大切さを世界に発信していこうという動きが活発です。そのためには世界、特に近隣のアジアの「平和ミュージアム」との交流が重要であるという考えから、今回、沖縄の3館長が招待されることになりました。

今回の主な訪問先は白色テロの痕跡である、二・二八記念碑や鄭南榕自由記念館、緑島人権文化園及び展示館（強制収容所跡）で、いずれも人権抑圧の暴力を感じさせる現場でした。見学後、収容所を改築した施設の一室で、台湾の人権問題に取り組む若い世代と沖縄の三館長の座談会も行われ、活発な質疑応答が交わされました。質疑を通して「二度と戦争を起こしてはならない」という「沖縄の非戦のこころ」がしっかりと伝わったのではないかと思います。

今回の交流の旅は、台湾で人権や平和問題について活動している人たちと知り合い、気持ちを分かち合い、手を結び合っていくことの大切さを感じることができた旅となりました。

最後に、今回、旅費などすべての経費を負担し、熱烈に歓迎してくれた林永発館長をはじめ蔡焜霖氏、曹欽榮氏、周焱鑫氏などすべての台湾の関係者のみな様に、紙面を借りて深く感謝申し上げます。



台東生活美学館でのレセプション

## 相思樹

### 故郷・三重での巡回展

説明員 尾鍋拓美

館は今年、初の県外巡回展を開催しており、私は三か所目の会場、故郷三重県の四日市市立博物館での開催準備に参加した。

戦前から工業都市であった四日市市は第二次大戦時に空襲の大きな被害を受けた地域である。四日市市立博物館でも、四日市空襲について展示し、また体験者の方からの聞き取りなどを行っている。

内覧会では展示説明をした。自己紹介で、三重県の中でも知る人ぞ知る山あいの地、四日市からは遠く離れた私の出身地を言ったところ、意外とご存じの方が多く、予想外のうれしい反応だった。

内覧会の時にお会いしたボランティアガイドの男性は、四日市空襲の体験者で、学校などに出向いて行って体験を伝えていらつしやるそうだ。この方から、「体験者の自分でも子どもたちに伝えるのは難しいと感じることがあるが、体験をしていない説明員というのは何を伝えようとしているのか」と質問を受けた。つられて思わずよみがえった三重弁で、「私は戦争のことを知れば知るほど、自分は二度と同じことを繰り返したくないと思う。そのためには一人でも多くの人に戦争を伝えて、同じ思いの人を増やしていかないと、と思っています」と答えた。

その方が納得してくれたかは分からないが、内覧会が終わってから、小学校四年生のお孫さんを連れた女性から「孫にはまだわからないかと思っただが、一生懸命説明を聞いて、この子なりに何かわかったみたいです。（戦争体験のないあなたの説明でも）伝わりますよ」と声をかけられた。その言葉に、私は大いに励まされたのだった。







## —女師・一高女沿革誌』P365)

沖縄戦を翌年に控えた1944(昭和19)年、女師・一高女の生徒たちは陣地構築作業に動員されるようになる。那覇市与儀の作業場では太田博少尉の指揮のもと作業に従事した。太田少尉は福島県郡山市の出身で、旧制郡山商業を卒業後、1944年8月に野戦高射砲第79大隊第2中隊指揮小隊長として沖縄に配備された。幾度か学校にも訪れたらしく、女師・一高女の卒業生たちに、その学舎の様子を描いた「相思樹の詩」という詩を贈った。その詩に師範学校女子部の音楽教諭東風平恵位が曲をつけ「別れの曲」と呼ばれるようになる。東風平先生は宮古島出身で、上野音楽学校(現東京芸術大学)を卒業後、沖縄師範学校女子部に赴任した。

「別れの曲」は卒業式で歌うために練習されたが、1945年3月29日、艦砲の鳴り響くなか、陸軍病院の三角兵舎で慌ただしく挙行された卒業式では歌われず、代わりに歌われたのは軍歌の「海ゆかば」だった。作詞した太田少尉は沖縄戦で死亡。作曲した東風平先生も6月19日の伊原第三外科壕への米軍の攻撃によって死亡した。

卒業を間近に控えた心情にとどまらず、「相思樹並木」「赤きいらか」「吾が寮」と、在りし日の学舎が描かれたこの歌は、ひめゆり同窓生にとって大切な歌となっている。戦後は慰霊祭で歌い継がれているばかりではなく、当館第4展示室「鎮魂」の部屋で、亡くなった教師・学友へのレクイエムとして流れている。

別れの曲 (作詞：太田博 作曲：東風平恵位)
------------------------

- 1 目に親し 相思樹並木  
     行きかえり 去りがたけれど  
     夢の如 とき年月の  
     行きにけん 後ぞくやしき
- 2 学舎の 赤きいらかも  
     別れなば なつかしからん  
     吾が寮に 睦みし友よ  
     忘るるな 離り住むとも
- 3 業なりて 巢立つよろこび  
     いや深き なげきぞこもる  
     いざさらば いとしの友よ

何時の日か 再び逢わん  
 4 微笑みて 吾等おくらん  
 すぎし日の 思い出秘めし  
 澄みまさる 明るきまみよ  
 すこやかに 幸多かれと 幸多かれと

女師・一高女のシンボルとして同窓生の胸に刻まれている「相思樹」は、学校の思い出を記す文章によく登場し、詩歌にも詠まれている。1945年当時の女師・一高女在学生の会は「相思樹会」<sup>i</sup>と名づけられた。1991年に仲宗根政善先生のことを連載した新聞記事<sup>ii</sup>のタイトルにも「相思樹」が使用されている。

沖縄戦で女師・一高女は廃校となったが、相思樹はその学舎のシンボルであり、ひめゆり同窓生にとって、学校時代の思い出を彩る大切なゆかりの木だと言える。

今は資料館の門前に並ぶ木立が、在りし日の面影をとどめている。

(学芸課 前泊克美)



## 参考資料

『ひめゆり—女師一高女沿革誌—』

(1987年6月7日 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会 会長 源ゆき子)

『戦争と平和のはざま—相思樹会員の軌跡—』

(1998年6月6日 ひめゆり同窓会相思樹会 元会長 福治秀子)

i 相思樹会(そうじじゅかい) —1966年に、1945年当時の在校生の会として発足した集まり。初代会長は仲吉キヨ(当時本科2年)。当初は慰霊祭後に集まりを持った。ひめゆり同窓会のヤングパワーとして慰霊祭の準備等を手がけた。1994年、ひめゆり同窓会と一本化。

ii 沖縄タイムスにて1991年6月20日から200回連載された「相思樹に吹く風 仲宗根政善と時代」長元朝浩



## ひめゆり研究ノート



# ③ コザ孤児院とコザ第4小学校

今年6月から10月にかけて、NHK沖縄放送局がアメリカの国立公文書館で新たに発見した「戦争孤児」のフィルムがくり返し放送された。フィルムは米軍が1945年8月にコザ孤児院と孤児院に併設されていたコザ第4小学校を撮影したもので、そこで先生をしていた元ひめゆり学徒（沖縄師範学校女子部）や元梯梧学徒（昭和高等女学校）の姿も記録されていた。

### (1) 概要

- ・1945年4月、米軍は旧越來村（現沖縄市）嘉間良に宣撫隊本部や難民収容所（通称：嘉間良収容所／米軍の名称：キャンプ・コザ）を設置した。収容地区は、隣接する室川・越來・安慶田・照屋一帯に拡大し、各地から難民が送られた。
- ・5月下旬、米軍は屋号「タードゥシ久場」「カミー久場」の2軒の民家を接收し、コザ孤児院の建設を始めた。一帯をぐるりと金網で囲み、真ん中に大きな広場を造って、そこにテント5棟、ブランコ、シーソー、すべり台などを設置した。「タードゥシ久場」はペルーに移民した久場良山の送金で建築した瓦ぶきの大きな家だった。母屋だけでなく、アシャギ（離れ座敷）や馬小屋も使用された。「カミー久場」は炊事場として使われた。テントには床が敷かれ、学年ごとに子どもたちが暮らしていた。
- ・孤児院は「子どもの家」と呼ばれ、高橋通仁（元沖縄県立盲聾学校教諭）が院長だった。
- ・沖縄戦で親を失った、あるいは家族とはぐれた子どもが800人以上（7月時点）集められた。子どもたちは戦闘によるケガや栄養失調、病気によって衰弱しており、孤児院で大勢亡くなった。
- ・6月末、元ひめゆり学徒の本村つる、玉那覇幸子、津波古ヒサ、仲里マサエ、阿部敏子、戸田武子、登川絹子、元梯梧学徒の稲福マサ、潮平

美枝子、小嶺幸子、第二高等女学校卒業生の崎浜らが世話係になった。

- ・7月中旬、孤児院内にコザ第4小学校が開校し、大山盛幸（元師範学校女子部附属大道小学校教諭）が校長に就任し、元ひめゆり学徒と元梯梧学徒が担任教員になった。
- ・10月初旬、コザ第4小学校は室川小学校に合流した。

### (2) コザ孤児院に関する米軍資料

- ・5月19日、軍政府本部はキャンプコザの軍政府チームに、住民福祉計画をいくつか示し、一つ選択せよ、と指示したので、我々は孤児院設置計画を選んだ。家畜増産を進めていた我々には都合のよい計画だった。というのも、集められた牛乳を、軍医療監視官の承認が得られれば、孤児たちに回すことができるからだ。5月20日、孤児院の設置場所を探す仕事が始まり、調査が行われた。テント、遊園地、学校、食堂など建設計画を本部に提出する用意がなされている。5月24日、住吉で孤児院建設が始まった。孤児院として我々が選んだ2軒の家屋の前でブルドーザーが土を掘り起こして遊園地を造った。この地区で最良の建物であるNo.7とNo.8が孤児院として選ばれたが、家屋No.8の家主は避難民に自宅を提供し、テントに住んでいると知らされた。その謙虚な人柄から、我々は孤児院の院長に相応しい人物だと判断した。彼はペルーに数年住んでいて、スペイン語を話せる。高潔な人物と思われる。コザの孤児院の運営はうまく行きそうだ。

（キャンプコザの軍政府チームC-1報告書〔上原正稔「戦争を生き残った者の記録64」2006年7月28日、琉球新報夕刊〕）

注：家主が家の提供に協力したのは事実であるが、孤児院の院長にはなっていない。

## (3) 勤務していた元学徒の証言

## ①本村つる

- ・私達が連れてきた子供達は離れ座敷をベニヤ板で四つに区切りそこに4・5人ずつ入れ、その世話を私達がすることになりました。子供達は着る物も十分でなく殆ど裸の状態でした。食事は母屋の前庭に並べてミルクとクラッカー等を与えていました。夜になると泣き出す子もいて抱きあげると懐に小さい手をいれて母親の乳をまさぐるのです。悲しくなって涙が出ました。
- ・私達の仕事は朝起きると同時に子供一人ひとりを浴びせることから始まり部屋を洗い流して午前中かかりました。殆どの子が下痢していました。この仕事はおよそ10日程だったと思いますが随分、長い間続いたような気がしました。やがて私達は学童の世話をすることになり、そのうちに孤児院内に学校が開設されコザ第4小学校と名乗りました。校舎はテントでそこは教室でもあり子供達の寝室でもありました。私達は全員その教師になりましたが子供達の兄弟姉妹のように放課後は日が暮れるまで陣取りやベースボール等して遊びました。

(シリーズ証言「学徒の戦後」No. 7「収容所から帰郷へ」ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより第22号 1998年11月30日)

## ②津波古ヒサ

- ・高橋通仁院長が主になって、子どもたちの名簿を作成した。大体3年生以上は自分の名前や生年月日、出身地などを答えられたが、1～2年生以下の子どもは、自分の名前もわからない子が多かった。体の大きさや話し方で、年齢や出身地を推定するしかなかった。
- ・2週間ほど経った7月下旬、コザ第4小学校ができて、1年生を担当した。本村さんが作ってくれた五十音表や絵を描いたカードを見せて大きな声で言わせるようにしたら、だんだん話せるようになってきた。学校ができてからは担任の子どもたちとテントで生活した。朝から晩まで24時間一緒だった。
- ・9月頃、台風がきた時は、テントは危ないので

家屋にみんなに手をつながせて避難した。子どもたちは戦争を思い出してワアワア泣いていた。私も怖かった。

- ・毎日たくさんの方が自分の子どもを探しに来た。親が来てないか目をキョロキョロさせている子もいたが、人が来ると隠れる子もいた。子どもを引き取るのに難しい手続きはなかった。私たちは一人でも多く家族や親戚の元に返したいと思っていたが、他人にもらわれて大変苦勞した子もいると後に知り、心が痛んだ。

(シリーズ証言「学徒の戦後」No. 4「収容所から帰郷へ」ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより第19号 1997年9月30日、および2010年5月15日・10月18日資料館にて聞き取り)

(学芸課 古賀徳子)

## 参考資料

謝花直美「一枚の写真・戦争孤児院物語1～6」  
2005年10月30日～11月4日 沖縄タイムス(朝刊)  
沖縄市総務部総務課『K O Z Aの本・4 21歳のアメリカ将校がみた終戦直後の沖縄』2005年3月、  
沖縄市役所



コザ孤児院の職員 後列左から津波古ヒサ、戸田武子、潮平美枝子、本村つる、仲里マサエ、高橋通仁院長、前列は真玉橋朝英(元開南中学校教諭)  
1945年7月

## 仲宗根政善日記抄 (43)

〔1980年〕一月二十二日

去る十二月に、平和をつくる百人委員会が発足した。新聞には大きく出たが、世話人は大方、七十歳をこえていた。行動力のある若者がすくない。次第に戦争体験を持つ者は減って行く。教師ももう戦争体験を持っている者は少いという。日ソの関係は次第に険悪になって行く。自民党の中には、ソ連での今回のオリンピックには、米国にならって、選手派遣をボイコットせよと主張する者が出て来た。日本国民は、次第に軍備の必要を説くようになるのではなからうか。日本は、次第に戦争への方向へと進みつつある。極めて危険なことである。この潮流にどう抗して行くべきか、戦争の悲惨さを知り、その罪悪を身に体して知っている者は、少しでも、この体験をいかして、阻止しなければならない。国民に再び二の舞を演ぜさせてはならない。微力でもこの潮流を阻止するために立たなければならない。

戦後三十五年にして、再び、歴史は同じ道を辿ろうとしている。

西銘知事も、背後に国家権力のあることを考えると、東亜共栄圏構想に似ている。慎重に対処して行かなければならない。

一月二十五日

午前十一時から、自由労連会館で、沖縄研究奨励賞の授与式があって、九時過ぎに家を出た。

「午前八時五十五分ごろ、沖縄県那覇市鏡水の航空自衛隊那覇基地で、点検中の空対空ミサイル通称「サイドワインダー」一基が爆発、作業中の隊員一人が死亡、三人が重軽傷を負った。同基地は、民間旅客機が離発着する那覇空港とすぐ隣り合わせにある。昭和三十三年航空自衛隊発足以来、ミサイルにかかわる爆発事故は初めて。防衛庁はこの事故にショックを受けており、反自衛隊感情の強

い沖縄での事故だけに、今後、基地反対運動の激化などが予想される。」（朝日新聞）

沖縄タイムスも琉球新報も特大記事を載せて報道している。来るべきものが来たというのが、多くの感想である。

沖縄戦で二十余万の犠牲を出し、その遺骨拾集の記事が、同じ紙面に出ている。いまだ拾集されない遺骨は二万を越すという。全島戦場と化し、屍は山野にちらかり、今なお洞窟のくらいかげに、そのままねむっている。

復帰したとはいえ、基地は日本全体の五十三%の基地が、沖縄に集中して、その機能は次第に強化されている。極東の要石としての重要性は、米ソの関係が悪化し、米国の軍備強化にともなってますます増しつつある。ブラウン米参謀総長は、日本に国防予算の増額を進めている。安保体制を堅持して、国を守ろうという以上、次第に米国の圧力に屈して行くであろうということは、明らかである。

米軍の諸種の事故の続出する中で、自衛隊が、かつて起こしたこともミサイルの爆発事故をおこしたことは、極めて重大である。この事故も、あるいは、ときがたつにつれて、普通のことになって行くかもしれない。戦争への道は、決して急激にやってくるのではない。極めて徐々に、人々が危険になれっこになり、危険を危険とも考えないようになって次第に戦争へとさそわれて行く。このミサイル事故は、海をはなれた本土の人たちは、いったいどのように受けとるのであろうか。おそらくは、遠い沖縄のこととして聞き流しているのではあるまいか。

沖縄の空は明るくすみきって青い。しかしこの光に照らされている基地の中に、蔵されているのは、すべて人殺しの凶器である。それはこれまでの戦争ではかつてなかった大量殺戮兵器である。

人を殺し、人類を破滅へと追いこむ凶器なのである。それは、他人を殺すばかりではなく、自らも殺すおそろべき凶器である。

ミサイルそのものは、敵国を殺すばかりではない。自国をも滅亡においこむのである。今度のミサイル爆発はこのことを象徴している。

死亡した後藤順一三曹は最初のその犠牲である。決して、彼一人で犠牲が終るのではなく、凶器によって、凶器を使用する国民もつぎつぎと死んで行くであろう。自らを守るという、ミサイルによる防衛でいったい、どれほど自国の国民の生命が守られるであろうか。

昨二十六日、郵便貯金会館二階会議室で、百人委員会小委員会の会議がもたれた。この爆発事故に対して、百人委員会は抗議声明を発表することを決定した。玉野井芳郎・仲宗根・宮城悦二郎の三名が、起草委員を委嘱された。

自らが平素、この面の知識を持ち合せず、玉野井委員におまかせしなければならず、心苦しく思った。

いかして平和を考え、平和を創造して行くか。具体的にどうして行くか、やはり、各人が自らの問題として問いかけて、考えぬいて実行にうつして行かなければならない。運動を経験していない者には、極めて困難なことであることを痛感させられる。

十月十日の空襲は、朝から晩まで、米軍艦載機の波状攻撃をくりかえして、全那覇市は火の海となった。小禄飛行場の上空もややうすぐらくなって、西日のあかりの中に、敵機が一機飛んで来たが、友軍の高射砲にうたれて、もんどりうって落ちて行った。全那覇市の猛火を目の前にしていたので喝采したのだが、次第に悲しくなった。今もあの米兵が、眼底に浮んで忘れられない。尊い人間の生命が、空からおちて行くのを、この目で見たから

である。

今度の空対空ミサイル爆発事件で、後藤順一三曹（二八才）が、事故で死んだ。自衛隊をにくむのあまり、あるいは、その死に、つめたい眼を向ける者もいるかもしれない。しかし、同じく人間の生命である。国を守るという名のもとにこうして死んで行く。人殺しの凶器のためにそのそばで、尊い人命が失われる。何という矛盾にみちたことか。

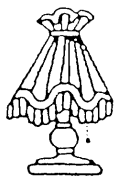
ちょうど米兵が落下して行った、あの地点で、三十六年たった今日、こんなことがくりかえされている。二十余万の沖縄戦の犠牲者の中にこの兵隊も加えられて行く。何というむなしいことか。これらの死について、深く考えなければ、戦争などさけられないのではなからうか。生命を重んずることがなければ、戦争は必ずやって来る。人殺しの凶器によって自らの生命をたつ。むなしいことである。

ミサイル爆発事故の記事のそばに、二千余柱のうずもれている埋没壕の記事が出ている。沖縄は屍の島である。

※読みやすさに考慮して、仮名遣い、旧漢字、句読点などを改め、字句を補った箇所がある。また、明らかな誤字は改めた。

※ [ ] は編集者による注釈。





# 本棚

(元琉球大学教授 仲程昌徳)

## 『ひめゆり平和祈念資料館20周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心』

ひめゆり平和祈念資料館の特質の一つに、「証言員」の活動というのがある。館では、沖縄戦を体験した方々が、直接「資料」の前に立って、来館者と向かい合い、話をするという場があって、それが、沖縄戦を伝える大きな役割を果たすものとなっている。「証言員」の役割は、それだけではない。彼女たちは、要望があれば、館の内外で「講話」をするのを厭わない。

ひめゆり平和祈念資料館の特質の二つ目に、記念事業・企画展の開催がある。開館一周年記念として行われた「ひめゆりの青春」特別展、開館10周年記念イベントとして開催された「沖縄戦の全学徒たち」展——学徒隊の実像と次代へのメッセージ、2001年の「仲宗根政善 浄魂を抱いた生涯」企画展、2003年の「ひめゆり学徒の戦後」展、2005年の「沖縄陸軍病院看護婦たちの沖縄戦」企画展、戦後60年「朗読「平和への祈り～ひめゆりの伝言～」そして開館20周年記念「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」特別企画展といったように、大きな労力を要する活動を行ってきた。そして、そこには、ひめゆりに限らず、沖縄戦に従軍した他の学徒たちにも視線を広げていこうとする意欲が見られた。また、今回の「巡回展」のように、館を出て、県外でも展覧を行うというように、沖縄戦を伝えるのに、懸命な努力がなされていた。

ひめゆり平和祈念資料館の特質の三つ目には、刊行物の発刊がある。定期刊行物の『感想文集 ひめゆり』『年報』『資料館だより』とともに特別企画展の報告書をはじめ『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』『墓碑銘—亡き師亡き友に捧げる—』『ひめゆり平和祈念資料館 資料集』1～4、そしてその他数多くのひめゆり関係書を刊行しているが、『ひめゆり平和祈念資料館二十周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心』もその一冊である。同書は、その題辞からわかるとおり「二十周年」を記念して刊行されたものである。

ひめゆり平和祈念資料館の特質は、これら三つにとどまるものではなく、さらに挙げるべきものを残しているが、そのような多彩・多様な活動を展開しているエネルギーはどこから出てきているの

だろうか。『ひめゆり平和祈念資料館二十周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心』は、そのことを照らし出すものとなっているが、資料館の活動を支えているのは「ひめゆりの心」と「証言員」はいう。

「ひめゆりの心」というのは、たいそう抽象的な言い方である。それをあえてありふれた言葉でいってしまえば「戦争はいやだ」という心とでもいっていいだろう。そのことを淡々と語ることが出来るようになるまでの、彼女たちのたどった戦後の懊悩は筆舌につくしがたいものがあった。それだけに、たちなおったあとの活動は熱をおびる。彼女らは、語ることに終始しているのではない。語ることで学び、時に県外、国外に出て、多くの交流をなし、企画・運営で妥協のない討議を行う。そして館の活動を日常的にこなし、次代に「ひめゆりの心」をどう手渡していくか模索する。その熱気を、本書は伝えてくれる。本書はまた、館で働く「受け継ぐ者として」の戦後世代の声を収録、彼ら／彼女らの「ひめゆり」との出会いが読めるが、「ひめゆりの心」をどう受け継ぐか。

福岡良明はその著『「戦争体験」の戦後史』で、『きけわだつみのこえ』とともに、わだつみ会の活動をとりあげ、「戦争体験」の継承、断絶という問題を「教養」という観点から論じているが、しめくくるにあたって「戦争体験は風化や断絶を重ねてきた。しかし、それは、伝承や継承の不可能性を示唆するものではない。むしろ、断絶の戦後史を直視するところに、記憶の継承や再生の契機が宿っているのではないだろうか」と書いていた。

『きけわだつみのこえ』とわだつみ会の関係は、『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』と「ひめゆり」の関係に類似していないわけでもない。それだけに、「ひめゆりの心」を受け継いでいく上で、多くの学ぶべきものがあるし、それを学ぶかたちで「ひめゆり」をどう受け継ぐかだけでなく、どう受け取られてきたか、検討してみるのも必要なことであろう。

# 声

## 母の思いを織り込んだひめゆりの学友への短歌<sup>とも</sup>

長かった梅雨も明け初夏へと向かうさわやかな季節となりました。宮良ルリ館長をはじめひめゆり平和祈念資料館の皆様にはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。6月が来るたびに「平和がいちばん」ということを思い慰霊の日には戦争でなくなった人達の霊を慰める日だと心に刻みつけ黙とうしております。

さてこのたび『ひめゆり平和祈念資料館 20周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心』の発行、誠におめでとうございます。父も「ほう～」と喜んでおりました。

資料館の設立当時の様子から20年間の一步一步のあゆみが年を追ってこと細かく記録され10名の証言者の方の座談会形式で17時間もかけて話し合われたことをまとめられているところは思わず見入ってしまい一気に読んでしまいました。一言で20年といってもその事業にかかわって築き上げた方々の努力、苦労等が生の迫力で伝わってきて、ひめゆり平和祈念資料館が命、平和について考える場としての役割や証言者の方々をはじめ館とかかわりを持つ人々が未来への贈り物として広い大きな心を持ってたずさわっていることが読み取れました。本当におつかれ様でした。労をねぎらいたい気持ちでいっぱいです。

開館以来1600万人余りの入館者がいるとのこと。平和の発信地として未来へ向けてのメッセージを伝える宇宙船として大きく羽ばたくことを期待します。また訪れた人ひとりひとりが平和の種子<sup>たね</sup>を持ちかえり、それを育み花を咲かせることにより戦争のない平和な世の中になってほしいものです。

母が65才から70才までの5年間、車もないのに首里から糸満のひめゆり資料館までバスで通い、つたないながらもお手伝いをさせていただいたことは、それぞれに沖縄戦を体験し、生き残された者としてやむにやまれぬ使命感や義務感<sup>とも</sup>があったからだと思います。子や孫には余り語らなかつた戦争体験ではありますが ひめゆりの学友への思いを織り込んだ短歌がありますので添えておきます。

平成11年（1999年）6月

- ・それぞれの胸に秘めたる重き<sup>も</sup>思い 活字となして永遠<sup>とわ</sup>の平和を
- ・千羽鶴 捧げて祈る高校生 逝きにし学友<sup>とも</sup>ら 十代なりき
- ・六月のこの青空を いま一度 壕に果てにし学友<sup>とも</sup>に見せたく

平成10年（1998年）1月

- ・土地奪い 海まで使うと考えし へりポート基地 心惑わす
- ・それぞれの胸に秘めたる重き<sup>も</sup>思い 平和の誓いと戦記<sup>ま</sup>に纏む

最後に巻末の資料、新聞記事の抜粋、チラシなどもきちんとまとめられて良かったです。「戦争の実相を伝えたい」「亡き師、亡き友の生きた証を残したい」という強い思いも感ぜられた記念誌になっているかと思えます。命題である次世代へのバトンタッチ、徐々にではあるが進んでいるでしょう。

津嘉山小で「命どう宝」のお話しをして下さった宮良先生、いつも亡くなった母のことを気にかけて下さる本村先生、ほか記念誌の中でお名前を見つけた先生方のパワー（老人力？）（人間力）に目を見張っていつも拍手をおくっています。

平良緋手代の娘 神里 年子

※平良緋手代さんは、当館の証言員として活動していました。

## ■休館のお知らせ

2011（平成23）年3月23日（水）～3月31日（木）

館内整備工事により休館させていただきます。大変ご迷惑をおかけいたします。

## 資料館ガイド

### ◆資料館ご利用案内

- ①入館受付 午前9時～午後5時 閉館 午後5時25分
- ②休館日 年中無休
- ③入館料 大人¥300 高校生¥200 小・中学生¥100  
団体20名以上 10%引き
- ④交通 那覇バスターミナルから糸満市行きバス<sup>⑨</sup>で約30分、さらに糸満バスターミナルから<sup>⑩</sup><sup>⑪</sup><sup>⑫</sup>のバスで約15分、ひめゆりの塔前バス下車。

### ◆多目的ホール利用の手引き

- ①多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話（約30分）や証言ビデオ（25分）を視聴することができます。
- ②ホールの予約は、1年前（その月の1日）から受付します。  
→例：来年10月31日までの受付は、今年10月1日受付開始。
- ③講話については、1日の回数が2回（1回40人以上）となります。  
毎週月曜日、講話は休みで、ビデオのみの予約受付となっておりますのでご了承ください。
- ④講話の時間帯 10：00 11：00 12：00 13：00 14：00 15：00  
ビデオの時間帯 09：00 10：00 11：00 12：00 13：00 14：00 15：00 16：00
- ⑤ご予約の際は空き状況をお電話でご確認ください。受付は先着順で、電話もしくは資料館窓口でのお申し込みとなります。  
いずれの場合も確認の為、指定申込書にご記入の上FAX又はホームページよりメールにてお送り下さい。
- ⑥ホールの収容人員は200人（席）です。
- ⑦ホールの利用は、入館していただく場合に限りです。また、講話・ビデオ以外には使用できません。
- ⑧講話は原則として当日の当番の証言員が対応します。講師謝礼及び施設使用料等は頂いておりません。
- ⑨年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～15日）は、証言員が休みの為講話はできません。また、慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映会を行いますので、予約はできません。
- ⑩ホール予約の方は、来館当日、窓口にご旨お知らせ下さい。

### ◆VTR室のご利用について

下記についてビデオを視聴することができます。

- ◇「平和への祈り－ひめゆり学徒隊の証言」（25分）
- ◇「仲宗根政善－浄魂を抱いた生涯」（30分）
- ◇「ひめゆり学徒の戦後」（33分）
- ◇「戦火に消えた21の学園」（26分）

---

ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第46号

2010（平成22）年11月30日発行

編集・発行 （財）沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館

資料館 ☎ 901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎ 098-997-2100

財団事務局 ☎ 902-0067 沖縄県那覇市安里 388-1 ☎ 098-884-1115

URL <http://www.himeyuri.or.jp/>

---